歴史と地形から、愛知を知る。ブラアイチ

SPOT スポット 11

殿橋の架橋 ～矢作川舟運の終焉～



殿橋渡り初めの様子　岡崎市蔵



1962 年に撮影された殿橋の様子。路面電車が中央を走る。　名古屋レール・アーカイブス蔵

1927年には、当時の最先端技術であった鉄筋コンクリート構造にて、中央に路面電車を複線通す「電車併用橋」として、殿橋が架橋されました。路面電車は1889年に開通した国鉄東海道線の岡崎駅と市中心部を結ぶために敷設されたものでした。

こういった道路交通網の発達や、鉄軌道の普及などにより、物資輸送において陸上輸送が増え、矢作川舟運も次第に陸上輸送に場を明け渡していくことになります。

また矢作川も明治用水をはじめとする様々な用水の通水や、越戸ダム（豊田市）の完成などにより、流水量が減少しました。

それに伴い、川船の就航※が困難となり、1935 年から 1944 年の間に、中世において岡崎のまちの発展、産業の発展を支えた矢作川舟運をはじめとした川船輸送は終焉を迎えます。

※特定の航路で定期的に運行されること。

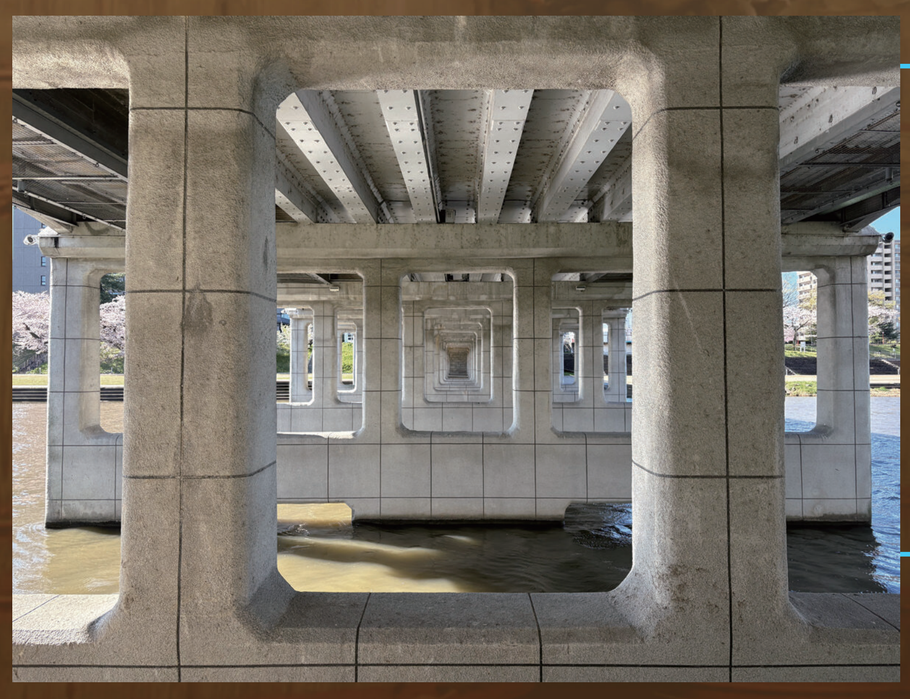
現代における殿橋

現代における殿橋は、2016 年の岡崎市政 100 周年の記念にあわせ、長寿命化リニューアル工事が行われました。また、明代橋とともにフルカラー LED 照明設備が設置され、季節や、啓発週間などに併せて、様々な色にその光の色を変え、岡崎市の夜間景観を彩ります。

例えば、ロシアのウクライナへの軍事侵攻を受け、犠牲者への哀悼の意を示すために、ウクライナの国旗をイメージしたライトアップが行われたり、能登半島地震による犠牲者への哀悼の意と被災を受けられた方への支援と復興への思いを示すために、石川県の県旗をイメージしたライトアップが行われました。



ウクライナ国旗をイメージしたライトアップ
中日新聞社 提供



2021 年には、公益社団法人土木学会の選奨土木遺産に認定されました。特に、対岸まで見通せる橋脚部分は SNS 上で「映える！」と注目されており、岡崎市のランドマークの１つとして愛される土木施設となっています。

来年、2027年には100歳を迎える殿橋。今後も岡崎の発展を支え、見守り続けます。

「SNS 映え」する殿橋の橋脚

歴史と地形から、愛知を知る。ブラアイチ

SPOT スポット 11

桜城橋の架橋 ～橋なのに公園!?～

2020年3月、殿橋とその上流に位置する明代橋の間に、桜城橋が架橋されました。

桜城橋は、その名称を公募により決定された、歩行者専用の橋（人道橋）ですが、大規模地震等の災害によって殿橋や明代橋の通行が不可能となった場合には、大型緊急車両（はしご車）が通行できるように荷重等を考慮した設計がされています。

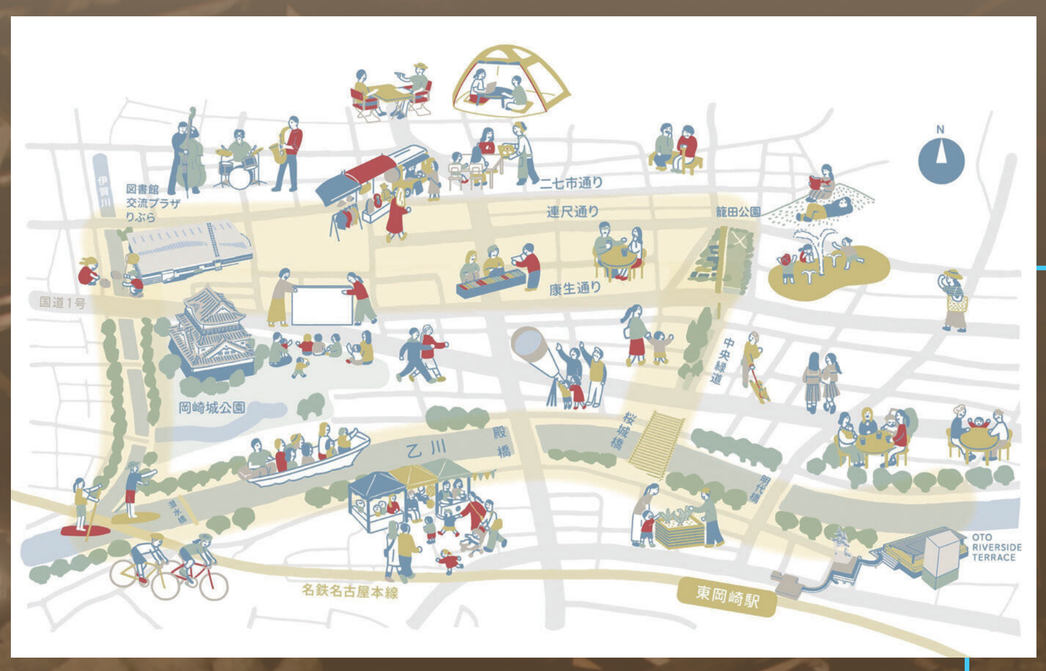
橋というと道路がイメージされやすいですが、実は桜城橋は公園の施設で、橋上は約2,000㎡の広場として整備がされています。その表面や欄干は乙川上流にある額田地区産のヒノキにより木装化され、歩行者がゆったりと景観を楽しめる空間になっています。また、岡崎市の面積の約6割を占める中山間地の材料を使うことで、水源地の木をその流域全体で使う「木の地産地消」といったメッセージを発信する意図が含まれています。



様々な活用をされる桜城橋



毎月第4土曜日の17時から行われている「桜城橋ふき」。
乙川上流の額田産ヒノキ材を乙川で汲んだ水で濡らした雑巾で拭きあげる。



QURUWA地区のイメージ図



キッチンカーで賑わう桜城橋。
イベント時にはこのように橋上に車両が乗ることもある。

現代のまちづくり

桜城橋橋上広場の活用は、川や公園をはじめとした、豊富な公共空間を活用して、まちの活性化を目指す、「QURUWA戦略」の中の1つのプロジェクトとして実施されています。

QURUWA戦略では、岡崎城を含む約1.57㎢の地区をQURUWA地区と命名し、桜城橋橋上広場の活用を含む、12のプロジェクトとともにまちづくりを進めています。

その中でも桜城橋は「街なかへのお迎え空間」として、名鉄東岡崎駅からQURUWA地区を訪れる人の「玄関」としての役割を果たしており、特に週末においては、橋の上にキッチンカー等が並び、まちなかに賑わいを創出する拠点となっています。

随所に出てくる「QURUWA」とは、岡崎市中心市街地における主要な人の回遊動線が上空から見るとアルファベットの「Q」の字に見えること、また、それを囲うQURUWA地区が、かつて田中吉政が築いた岡崎城の総曲輪と重なることから、「QURUWA」と命名されています。